

# 会報

No.10

2002.4.15



# ピースデポ 平和資料協同組合

Peace Depot (Peace Resources Cooperative)

発行人:梅林宏道/住所:〒223-0051 横浜市港北区箕輪町3-3-1吉ケリューネ102  
 TEL:045-563-5101/FAX:045-563-9907/E-mail:office@peacedepot.org  
 郵便振替:00250-1-41182 特定非営利活動法人ピースデポ  
 銀行口座:横浜銀行日吉支店 普通 1561710 特定非営利活動法人ピースデポ

ペルベズ・フードボイさん講演会

## 増大する核の脅威 ～9.11後のアフガン・印・パ～

2月23日、総会記念イベントとして、「パキスタンから見たアフガン、アメリカ、核」と題されたビデオ上映と講演会を、かながわ労働プラザで開催しました。講師には、パキスタンより物理学者ペルベズ・フードボイ氏を招き、氏が作製したビデオ「核の影に覆われたパキスタンとインド」を約60名の出席者のもと、上映しました。

以下、講演の概略を紹介します。(文責はピースデポ)

### ■米はアフガンを救ったのか

9.11はアフガニスタンの歴史にとって転機であった。米国はタリバンを破滅させ、アルカイダの残党を追い詰めている。タリバンの悪夢は過去のものとなった。

だが、アフガニスタンの抱える問題が終りを迎えたわけではない。新政府はカブール以外では行政機能を行なえず、地方はタリバン前の無政府状態へと戻ってきており。アフガンの人々の悲劇の責任は誰にあるのだろうか。

タリバンとパキスタンのみをこの悲劇の責任者とすることは、歴史上の重大な不公平である。1980年代にタリバンを生み出した原理主義を忘れてはならない。米国はパキスタンと手に手を取り、アフガンの将軍達を対ソビエト戦争に動員したのである。そしてソ連崩壊後、米国は自分達の使命は終わったとばかりに、アフガニスタンを混乱の中に残したまま手を引いた。

### ■印・パ国境に100万人の兵

9.11を機に、パキスタン政府は米国の圧力に屈して政策転換した。現在ムシャラフ大統領は米国の支持を全面に受けしており、今後しばらくムシャラフ大統領の政権が続くと考えられる。現実主義者である彼は、軍事力がパキスタンの正当な力であり、また国家を守る守護者であると考えているパキスタン軍部をあらゆる意味で代表する人物である。

インドは、同時テロ攻撃に関して、対パという観点からは得をすると考えていた。たしかに一方では、インドは米国からパキスタンに圧力をかけさせることには成功し、パキスタン内の過激派グループの力を減少させることができた。この点はインドにとって勝利であった。

しかしインド領域内の過激派の活動は活発になった。これら過激派の多くはパキスタン内に拠点を持っていて、ムシャ

ラフ大統領の力を弱めようとしている。さらには印・パ間に戦争を引き起こそうと狙っている。

この現状に対するインド政治界の反応は非常に好戦的な雰囲気に包まれており、現在、100万もの兵士がインド・パキスタン国境に展開されており、実際に爆撃が行われている。

現在、この2つの核保有国が行っていることは、黙示録の再生である。ミサイルは5分で相手国に到達する。事故や偶発的なミサイル発射の可能性はあまりにも大きすぎる。



### ■日本の強い発言力に期待

日本は両国の緊張緩和のために働きかけるべきだ。重要な理由は2つある。一つは日本が核兵器による攻撃を経験した世界でも唯一の国であることだ。日本の発言には道徳的な力がある。第2の理由は、日本の経済的な観点からも強い発言権を持っている。パキスタンは日本に対して、パキスタンの債務の20%にもあたる80億の債務を負っている。したがって日本は、インド・パキスタンに対して圧力をかけ、少なくとも交渉をせよということができるはずである。

出席者の感想より  
新鮮な驚きを受けました

「平和問題」といえば「反戦運動」と機械的にイメージする人が多い中で、昨年の9月11日以降、平和に対する人々の意識は、少しずつ変わってきてているような気がします。そうした中、アフガンとのかかわりが深く、世界情勢の中で微妙な位置にあるパキスタンから、しかも、パキスタン国内で平和運動を続けている方から直接お話を聞く機会を得られたのは、非常に幸運でした。しかも、パキスタンの中において、インドの平和運動家との協力を模索している人がいることなど、私にとっては、新鮮な驚きです。また、見せていただいたビデオは、これまでの反核平和のビデオと違い、新たな視点で作られていると感じました。今後とも、ピースデポには、人々の意識が「平和問題」＝「反戦運動」という単純な図式にならないよう、このような機会を設けていただけるようお願いするとともに、こうした企画に幅広い方々が参加することを願っております。(横浜市在住の西海さん)

# スタッフ3人体制 生かして、 飛躍への道すじを ～2002年度の課題と事業～

2月24日、県立かながわ労働プラザで、第3回ピースデポ総会が開催されました。会員の有地淑羽さんの議長のもとで、昨2001年度の事業報告と収支決算の承認に続き、2002年度の事業計画と収支予算、および役員の改選が提案され、採択されました。(2001年度事業報告と決算、2002年度の事業計画と予算の全文はホームページwww.peacedepot.orgにあります。)

## ●中期ビジョン委員会の設立

ピースデポは発足5年目を迎え、組織基盤固めに向けた新たな試みに挑戦する。昨2001年に掲げられた組織面での3つの中期目標のうち、事務所の安定的維持と事業発展に不可欠な「フルタイム3人体制」が昨年8月に、そして後述するように、事業の効率化のための「ワンフロアの事務所」のめどがついた(今年2月に実現)。これによりピースデポの組織基盤体制づくりへのとり組みは、第2ステージへと大きく躍進した。

これらの進展を踏まえ、安定した財政的基盤確保のために、新しくかつ具体的なアプローチが求められている。それを基に、ピースデポが若いNGO平和活動家・研究者が意欲的な活動に挑戦できるような場となるための基盤を作りたい。

この課題の実現への媒体となるのが、田巻一彦理事を中心に、理事数名ほか委員長の委託する数名で構成される「中期ビジョン委員会」である。同委員会は、ピースデポの2001年度末の資産である約630万円の繰越金を原資として新事業を立ち上げ、それを発展させることにより数年後の経営の安定化を目指していく。したがって、後述のように、当期としては繰越金を切り崩す形の「赤字予算」を組むが、こうした意欲的な新規事業へのとり組みは、数年後の財政好転を見越した「投資」であり、その財政的裏付けを担うのが中期ビジョン委員会、という位置付けになる。

## ■新プログラム

### (1)「核軍縮:日本の成績表—NPT(13+2)項目に関する評価」

2000年NPT再検討会議における13項目合意、それに端を発した日本政府の新決議「核兵器全面廃棄への道筋」によって作られた新しい肯定的状況を、日本の真の政策転換へと導くために、情報に基づいた日本の政策評価を行う。(2002年版をすでに3月に外務大臣に提出、4月にNPT準備委員会において英語版を配布した。)

### (2)核軍縮議員ネットワーク(PNND)支援

MPI(中堅国家構想)による国際的議員ネットワークの支援。

### (3)「核兵器・核実験モニター」電子速報版の発行

電子メディアでモニターの内容の速報情報を提供(会員を対象)。

### (4)2冊の単行本の出版

#### a.「安全の幻想:ミサイル防衛(仮)」

(会員の黒崎輝さんによる翻訳)

#### b.「核兵器撤廃への道」

(杉江栄一さん(助言者・会員)による書き下ろし)

### (5)イアブック「核軍縮と非核自治体・2002」発行と執筆者の制度化

内容の充実と編集業務の効率化をめざして、分野別に執筆者を想定した分担制度の確立。

### (6)原子力空母母港問題調査プロジェクトのワーキングペーパー発行

「NEPAの会」と共同で、「空母母港史」「有害廃棄物汚染」についてのワーキング・ペーパー発行。

### (7)事務所会議室活用計画の模索と試行

「平和問題古書リサイクル・コーナー」の設置やセミナー・講座開催など、事務所拡張後の旧事務所空間の活用計画。

## ■継続プログラム

### (1)「核兵器・核実験モニター」の発行

### (2)東アジアにおける協調的安全保障に資する調査・啓発

- a. 新ガイドライン・周辺事態法のフォローアップ、有事法制化の動き
- b. 東北アジア非核地帯に関する国際情勢や市民の動き
- c. TMDを含むミサイル防衛計画

### (3)日本の情報公開法を活用した防衛・外交問題の調査

### (4)調査プロジェクト「米軍」

### (5)執筆、講演、出演、取材への協力

### (6)海外活動への派遣

NPT準備委員会(4月、ニューヨーク)、IPRA(国際平和研究協会)総会(7月、ソウル)、沖縄への調査活動のための派遣(海外ではないが)など。

### (7)公開講演会の開催

### (8)ウェブサイトの充実

## ■関心を継続し、機会を模索するプログラム

「戦争防止地球行動」(GAI)のフォローアップ/各地でのセミナー開催(核軍縮、安全保障)/子どものための「平和読本」/展示用ポスター、平和運動グッズの収集、整理/政党の平和政策データベース/日本への核兵器持ち込み国内議論のデータベース

## ■その他、必要な事業

## ■組織体制の整備

「中期ビジョン委員会の設置」以外に、

### (1)理事の拡充

女性理事2人一首藤もと子(筑波大学助教授)、道原海子(北東アジアの非核地帯化をめざす全国ネットワーク)一を増やし、前期理事と合わせて計12人体制(定款で許された最大数)とする。

### (2)ワンフロアの事務所

最も経済的な選択として、現事務所の隣室を借りて通

し部屋にする。広さは2001年までの合計38.9平米(7万円)から55.1平米(家賃14万円、敷金などなし)に拡張する。

### (3)会員、地域ポスト、定期刊行物固定読者の拡大

自治体、図書館、公民館、労組などで定期的に売っているために、各地の会員からの協力を要請していく。

### (4)ニュースレターの発行

地域ポスト会議での議論を踏まえ、地域情報を含む会員の意見表明・交換の内容を盛り込み、会の活動や運営状況を伝える会報の発行。年度内に日本語版を最低2回、英語版ニュースレターを2回発行する。

### (5)「地域だより」の発行

上記(4)のように、地域ポスト会議において、「地域だより」は発行を中止し、かわりに会報の拡充をはかると決定。

### (6)助成金、補助金の開拓

**中期ビジョン委員会では、現在、以下のような新事業のアイデアが検討されています。**

皆さんからのアイデアやボランティア参加を歓迎します。

#### ●定期英文リリース：軍事基地と人権・環境

日本のメディアで報道された在日米軍等に関する記事を「人権・環境」といったグローバルな視点からまとめ、英文に翻訳して、メーリングリストでリリースする。マスメディアのレベルの正確さと客観性で、一般的な市民が一般に知りうる範囲内の情報を、ピースデポならではの分析をベースとした編集で海外の市民向けに発信する。

#### ●年鑑冊子「核軍縮と非核自治体」の改訂による出版拡大

必要な改訂を加えることにより、毎年の販売実績を約100部から3000部に拡大するよう模索。

#### ●市民セミナー開催による会員拡大

市民に開かれたセミナーを定期的に開催し、新しい市民層との顔の見える出会いを作り出す。

#### ●「速報会員」の開拓

記者や議員を念頭に、「核兵器・核実験モニター」に掲載前の個々の原稿や原資料をホームページに載せ、対価を徴収する。

#### ●市民向け教材の作成と販売

若い人たちの感覚で、高校生・先生が使えるような視聴覚教材等を作る。デザイン補助者などのボランティアを募る。

## 会報が変わりました

### ●ページをつくるのはあなたです●

先日の総会で出たアイデアをもとに会報を新しくしました。まずは次のようなコーナーを試しています。会員の皆様からのご意見・ご感想、活動の紹介や投稿、会報に載せたい企画の提案など、どしどしあ寄せ下さい。

#### ■会員の一言コラム(3ページ)

#### ■フォーラム「世代間の対話」(4~5ページ)

「なぜ平和運動が若者に広がらないのか」

#### ■「核兵器・核実験モニター」記事への意見(6ページ)

#### ■地域トピックス(6ページ)

#### ■ピースデポ・ひとらん 第1回(7ページ)

## 会員の一言コラム

# 新人として向き合う

かいこ

道原海子さん



ピースデポの事務所は、小さな丘の中腹にある。スタッフの秋山嬢に言わせれば、これは「山」だと言う。「この坂道がしんどいのよ」と言うのは先輩理事の津留さんだ。

坂は急とも言えず、緩やかでもない。

春、坂の下に立つと、事務所は、爛漫と咲く桜の花の夢色のむこうに見えかくれする。異界へと招き入れるような、何か象徴的で、不慣れな坂道が面白く、私はいっとき、顎を上げて、空や樹木を見やる。茫洋として全容の不確かな、あの丘のてっぺんに行ってみたいと思う。思いながら虚子の句をつぶやいた。

### 春風や 開志いたきて 丘に立つ

高濱虚子40歳。漱石の「吾輩は猫である」が連載された文芸誌「ホトギス」が200号を数えた年の作。虚子は腸を病み、臥床しがちだった。

ピースデポ事務所への坂道で、虚子の句が口を付いて出てきたのには、前奏がある。今世の大テーマである人間しさの保存から、遠くなるばかりの昨今の政治状況に、心底からつき上がってくる、じっとしていられないと思うこの傾向を、何と形容したらピッタリくるのか、道々考えていたのだ。これは閑志だと納得したとき、いつか写真で見た虚子の、精悍な面差しが彷彿した。

虚子は86歳で没するまで、よく仕事をした。閑志の行方は明白だった。

今年、私は最も具体的で可視的な、つまり数量化できる運動テーマを、生活のなかに位置付ける選択をした。これが私の閑志の結果です、と見える形にしたいという欲求があったからだ。

私は一期2年という理事職と地域ポスト(編者注:道原さんは東京ポスト)という二つの役割を引き受けた。両肩に鳥を乗せたようにして歩くことになったわけである。

第一歩は、総会で決定された方針にそって活動することから始まる。それには自分の目標と計画を、ひそかに、だがどっしりと作らねばならない。

ともあれ、私は新人、新しい人である。新しい人は新しいことをやらねばならぬ。新しいことは誰だって不慣れだから、注意深く、元気に取り組まなければならないと思っている。

## アピールの努力見えない

鍵田亜基(会社員・23歳)

まずは、平和活動を行っている当事者が、どれだけ若者の興味や関心をそそる努力をしているかを私は問いたい。

例えばピースポートは、各国の参加者との交流を通じ、信頼醸成の場を提供しており、例年学生が多数参加している。

問題意識を共有し、意見を戦わせる仲間を見つけられる活動は若者を引きつける。とりわけ、横のつながりだけでなく、先輩との縦のつながりも提供できれば年齢を問わず人が集まる。それゆえに、若者=平和運動に興味がない、とレッテルを貼るのではなく、まずは運動を行う団体とそこで働くスタッフの魅力をアピールする努力が必要なのではないか。

平和な世界を構築するための作業には、若者であろうと、一個人であろうと十分関わることができる。それゆえに、専門家対象の活動と、一般市民向けの活動の2つのカテゴリーの住み分けをしていくことが必要な課題ではないか。

## 嫌気・無関心・不信感?

佐藤江鈴子(大学院生・25歳)

なぜ若者が核問題に関心を有さないか。少なくとも2点指摘できる。第一は意識の問題で、核問題に対する嫌気または無関心だ。自分は広島出身で子どもの頃から平和教育を受けてきたが、成長すると教育のあり方が一方的な押しつけであったように思われ、問題自体に嫌気を感じ、反発して運動には参加しなかった。また、冷戦終結後、多数の核以外のグローバルなアジェンダの出現で、核問題への関心が希薄化した。さらに核問題と個人の実生活との連関を想像しづらく、それが無関心さを醸成したのではないか。第二には、戦後の平和運動への不信感が挙げられる。イデオロギーからの運動団体間の対立などが、実態を不透明なものにした。

これらを克服するには、国内およびトランクショナルな政策決定プロセスにおける市民一般の参加が必要だ。そのための基盤として、NGOには自己改革の姿勢が肝要であり、活動の透明性を高め、説明責任を果たしていく必要がある。

## スローガンの土台を伝えよう

竹峰誠一郎(大学院生・25歳)

私は大学院でマーシャル諸島の核実験を研究している。マーシャル諸島の核実験の実相は、平和運動や報道によって伝えられてきた。私の研究はこれらの上にこそある。

平和運動は、若い人々へ、平和を破壊するものに対する「闘い」に共に立ち上がることを求めてきた。それらのスローガンは「核実験反対!」「基地建設反対!」「自衛隊の海外派兵反対!」「憲法を護れ!」「有事法制反対!」...である。平和運動

## フォーラム「世代間の対話」

# なぜ、平和運動は若者?

「平和運動はよくわからない」という声が若者からしばしば聞かれます。先日の総会でも話し合われました。まずは世代間での意見交換です。毎回テーマに沿って、平和運動に携わる異なる世代の意見交換です。

ピースデボの会員を中心に20代の若手4人と市民運動の経験者4人で手を加えさせていただきました。このコーナーへの皆さんのお意見

は、反核・反戦・反基地・憲法擁護が先にありきて、なぜこれが平和運動の中心的課題とされているのか伝えてこなかった。そのため、「平和運動」に参加している個々人の平和の原点は、こうしたスローガンの後ろに霞みがちであった。

スローガンをただ叫ぶだけでは若い人々の心に響かない。「平和運動」は、スローガンを叫ぶ土台にある(はずの)、平和の素晴らしいしさをより積極的に伝えていく必要がある。

## 生活に結びつく「危険」感じられない 山口響(大学院生・25歳)

僕たちの世代は物質的価値を享受しているので、力ネモノよりも人間関係の中に生きがいを求める人が多いのです。キャンパスでのゴミ分別[環境]・貧しい国での井戸掘り[開発]・寝たきりの人の介護[福祉]等、他人のためになり、自分にも生きがいを与えてくれる活動に魅力を感じています。

たしかに、平和運動は、これらと違って、日々の事業があるわけではないから、運動への参加自体が生きがいを与えていくことは事実です。しかし、『核兵器・核実験モニター』の発送作業などは、それ自体なかなか楽しいものです。ただ、そうした「楽しみ」に加えて、より根本的には、自らの「生活・生命」と核・軍事の問題が結びついていなければ人は集まりません。その結びつきを最も実感させてくれるのが広島・長崎の経験であることは論をまたないとしても、過去のことだと捉えられてしまえばおしまいです。現在の日本において、核の危険性を肌で感じられるのは、原発・核の持ち込みといった場面においてでしょう。それらに不安を持ち、自分への不利益を感じられる人でなければ、平和運動に参加しようという気にはなかなかならないのではないかでしょうか。

## 知識与えるのではなく、考える場を 茂垣達也(生協職員・41歳)

若者が「平和」のことをどの程度認識しているのかがまず問題と言える。これは教育の問題であり、学校や家庭での平和教育のありかたや、それが若者にどう生きているかが問われている。今の若者は「平和」についての特定のイメージを

# 者に広がらないのか

ます。平和運動に若い世代の人々の力を取り入れることの大切や議論の場をつくることから始めよう、と生まれたのがこのコ一見を紹介していきます。  
人がそれぞれの意見を寄せてくれました。(原文に編集部の責任をお待ちしています。)

持っていないし、知らないといつても過言ではないと思う。

では若者に知らせることが重要なのか。学校の勉強のように、知識を与えていくことが大切だとは思えない。押しつけ的に与えられる情報は、若者自身が拒絶するだろう。

生協では、地域・職域・医療で平和の活動がおこなわれているが、その中には、大学生協による「ピースナウ」という広島・長崎・沖縄への学習ツアーがある。被爆者の話を聞くことやフィールドワークだけではなく、そこで見聞きしたことをもとにディスカッションをおこなうことにより、自分の問題として捉えることができている。このように若者自身が考え、行動するステージを作っていくことが必要である。こうした場を用意することが私たちの役目ではないだろうか。

## 過去を知ることから生まれる批判精神 杉江栄一(軍縮問題研究家・73歳)

最近知覧特攻基地を訪れる機会があった。知覧は、私の予想に反して、死者を追悼する華麗なモニュメントが立ち並び、多数の観光客の列が絶えない名所に変貌していた。この光景に私は憤りを通り越して悲哀の情を禁じえなかった。

知覧は、狂気の侵略戦争にかりだされた若者が死地に飛び立った痛恨の地である。若者たちの遺書を読む人びとの心は複雑である。「かわいそう」と私の背後で女子高生が囁いていた。哀れみの感情しか誘わなかつたら展示は何を伝ええたのだろうか。現場で働いていた中年の男性は、昨今の若者に命を賭して祖国に殉じる気持ちがないことを嘆いていた。「知覧特攻平和会館」のリーフレットには、「若き勇士が雲流るる果て、遙か逝いて帰らざる」壮途につかれた思い出の深い地、とあった。知覧のモニュメントは特攻出撃を「壮途」とえがくことによって、あの無謀で愚かな戦争への反省はおろか何の教訓も伝えていないのである。それどころか特攻を利用して観光客を集め手段にさえしている。

戦争を伝えることは、悲惨さを教えて死者の靈を弔うためだけではない。侵略戦争に追随した当時の日本人のあやまちに思いをいたす精神の活性化でなければならない。知覧の展示が歴史の真実を歪め、現在の日本人の批判精神を眠らせていることが、私には限りなく悲しい思い出になった。

## 若い人にも組織の中で責任を

内藤雅義(弁護士・52歳)

活動に参加するかどうかは、その中に自己への肯定感や、存在感をもてるかどうかにかかっている。世代とは関係がない。若い人が平和運動に参加しなくなつたのは、平和運動にそのような意義を見いだせなくなつたからではなかろうか。

戦後間もなくは、自分達の力で社会を変えられるという希望があり、若い人はそこに運動の意義を見いだした。しかしその後、若い人が実感し、自らを立ち上がらせる社会的不正は高度経済成長を経て見えにくくなつた。さらに平和運動の内部対立は、自分が運動に利用されるという懷疑さえ生んだ。にもかかわらず、日本の平和運動は、長い間、古い「べき」論と、狼少年のような「危機が来る」型の運動を続け過ぎた。

広島、長崎の体験を通じて核兵器は絶対に許せないと感じている日本人は少なくない。私は、この体験を通じて日本こそが戦争のない世界を築く力を持ちうると思っている。

これまでの平和運動は、自分達の力で具体的に問題を解決するという志向を避けてきた。とりわけ、アジアの安全保障を実現する方法を具体的に提示しなければならない。

未来を考え、現状を変えること、その力を持っているのは若い人である。そして、組織としてもできるだけ若い人に一定の責任を与える運営が必要であると思う。

## 自由になった若者に希望

藤田明史(大学非常勤講師・52歳)

今まで経済成長や消費文化の呪縛にとらわれ、とくに若者は、平和問題に関心さえもてなかつたからだと思います。

次の10年を考え、私は何をしたいのか。それは社会変革ですね。それも平和という価値を実現するための運動に係わって行きたい。ガルトゥングの「構造的暴力」は面白くて、その中に社会科学の主要な問題のほとんどが入ってきます。私は数年前に彼に出会い、かなり洗脳されました。というのも、私は1970年前後の大学紛争の時期に学生生活を送り、マルクスを通して社会科学というものを知った世代ですから。

私は企業に就職し、当時は社会の安定が見込まれたため、同世代の若者の活力も企業にその大半が吸い取られました。その後どうなつたか。今、おやじはリストラされ、子供は就職難に直面し、ホームレスも他人事ではありません。しかしこうした状況にむしろ可能性を見出します。日本は良い方向に変化しつつあるのではないかですか。

学校や企業や国家から自由になった若者が増えています。もっとも彼らはお金からも自由になっているでしょう。しかしここに希望があります。お金をあまりもうけなくてもやっていける社会はいかにして可能か、これが現代の中心的な問題だと私は考えます。

## 「核兵器・核実験モニター」記事への意見

第158・9号に掲載された横山正樹理事によるエッセイ、「軍事力によらない安全保障」ってホントは何?」は「軍事力」や「安全保障」の概念を広くとらえる必要性と、ピースデポの活動の有用性を会員や助言者にあらためて問い合わせました。このエッセイに対して、会員の田辺俊明さんから以下のコメントが届きました。

(「モニター」掲載記事へのご意見・ご感想をお待ちしています)

# 世界を視野に、 『軍縮』に特化を

田辺俊明

### 1. 「軍事力」の問い合わせ

軍事力、警察力とともに、「物理的力」という点で共通しているが、問題になるのは、物理的な力の存在そのものではなく、その物理的な力の行使に正当性があるかないかである。そうすると、解決のための選択肢は、国際社会における軍事力を位置付けるための政治倫理的な条件を創出するか、あるいは、軍事力の行使そのものを全面否定するかの2つしかない。だが、後者の道を選ぶとしても、国際社会における普遍的な合意が条件となる。そのようなことが可能であるならば、前者の道も当然可能となるだろう。

### 2. 「安全保障」概念の問い合わせ

ガルトゥングの先進国(中心)一発展途上国(周辺)間の支配・従属関係によって説明される国際社会の「構造」が生み出す富の分配の格差を正当化する者は今や最も保守的な理論家を含めて誰もいない(市場原理主義と批判される世界銀行を含む)。その意味で、人間の安全保障は「世界中の人々のサブシステム維持・回復」を意味するということについては、誰も反論しない。問題は、このような富の分配の格差をどのように解消するかという方法論の次元に既に移行している。例えば、グローバル化問題にとりくむ世界のNGOが議論を展開しているのは、こうした次元においてである。

### 3. ピースデポの有効性の問い合わせ

平和の問題を、「軍縮問題」から、「南北問題」にまで広げるのは、理論的には面白いのだが、運動としてみた場合には、極めて焦点がぼやけてしまうという問題がある。したがって、人的、財政的資源の制約を考慮した場合、ピースデポが、「南北問題」の視点を入れつつも、「軍縮問題」に特化することには十分に理由があることだろう。これからはNGOでも専門分化がますます進展すると考えられるが、その意味でも、「ニッチ」を確保しておくのは重要なことである。ただし、「軍縮問題」に特化すると言っても、それが「軍事オタク的」になっていって他との接点を失う結果となってはならないであろう。また、沖縄の基地やヒロシマ・ナガサキなど、あまりに日本の軍縮問題に囚われるあまりに、世界の軍縮問題が視野に入ってこなければ、若い世代にとっての魅力が失われるであろう。

## 地域トピックス

### 京都:春~夏 ピースカレンダー (地域ポスト有地淑羽)



#### ●4月13日(土)スターウォーズ・ビデオ鑑賞(奈良)

奈良ポスト木村宥子さんのお招きで「Nukes In Space～アメリカ・宇宙支配の野望～」と「STAR WARS RETURNS・帰ってきたスター・ウォーズ～暴走する軍産複合体～」(広島・大庭里美さん制作)というビデオを見る会に出席。

#### ●4月14日(日)ガルトゥングの平和学トレーニング

京都YWCAで。京都でも非暴力平和隊に参加しようという若者が多く集まっています。立命館大学内にも去年サークルが。

#### ●4月20日(土)

##### 核戦争防止・京都医師の会「20周年を祝う会」

原爆パネルの展示や、「核の影に覆われたパキスタンとインド」のビデオや「アメリカ・宇宙支配の野望」のビデオ上映など。

#### ●4月29日(土)映画と講演会 1:30～4:00

##### 立命館大学国際平和ミュージアム・中野ホール

「軍隊を捨てた国・コスタリカ」の映画上映と講演会。「平和友の会」の会報100号記念の企画で、講師にはピースデポ会員・藤岡惇さん(立命館大学経済学部教授)や早乙女愛さん、足立力也さんを迎えます。

#### ●5月(未定)

関西のピースデポ会員が定期的な学習、読書会を計画中。第一回目は、藤田明史さんからの「第51回パグウォッシュ会議(印・アグラ)」の報告会と交流会。

#### ●5月17日(金) 2:00～2:20

城陽市の商工会館で「数字でみる平和」講演。世界の軍事費80兆円があったらこんなことに使える、などの話を。

#### ●6月2日(日)

竹林さん(西宮市)呼びかけによるピースマーチ。

#### ●6月21日～26日

平和行進が京都に入ります。

#### ●7月31日～8月9日

京都の戦争展、立命館大学国際平和ミュージアムで開催。

●8月5日から広島に帰省予定、どんな方たちと再会できるか楽しみにしています。

各地での活動の情報を寄せ下さい。形式は自由です。

## 「14歳の私」からのメッセージ

今回のお相手は、「少女・14歳の原爆体験記」(ピースデポの本・高文研刊)の著者で詩人の橋爪文さんです。「反核の種蒔き」として世界中を歩き、自らの被爆体験を通して平和の大切さを語り続ける橋爪さんですが、最近4ヶ月間のニュージーランド滞在から帰国ということで、お話を聞いてきました。(聞き手:中村桂子)



「私が原爆を受けたのが14歳でしょ、だから(その年代の子どもに)一番知って欲しいですね。」

大きい子に対しては、私が原爆受けたのが14歳でしょ、だから14歳から18歳くらいの子どもに一番知って欲しいですね。体験の実情だけではなく、知って欲しいこと、考えて欲しいことがあるわけですよ。だから、初めに、「私がなぜこういう話を皆さんにするか」というと、今世界にはまだ3万発以上の核兵器があって、皆さんの上にもこういうことが起こる可能性があるからなのですよ」ということを言ってから体験を話します。私を火の中から助けてくれた人も16歳だったし、私が体験を語るようになったのも息子が16歳だったときで、皆さんの年頃は物事を見る、思うときなのよ、と話します。

—ニュージーランドの人たちに「平和」を伝えた印象はどうですか。

それから、私は原爆の体験の中で、「緑」つまり種が芽を吹いた、命の出る喜びに感動しました。ニュージーランドは世界で一番緑の多い国なんです。そんな国に暮らしているみなさんは幸せなんだ、そしてその中から考えて欲しい、というようなことを伝えました。現地に住んでいる人の中には、ニュージーランドの若者は平和の中で危機感が薄いと言う人もいますけれど、私の話を聞いていた子ども達はみんな真剣でしたよ。先生が授業の時でもこんな集中した顔は見せない、と言ったくらい。

—9.11後の世界の動きとの関連は?

予定が合わず行けなかったのが、アフガン難民の大勢している地域にある学校です。アフガン難民の子に原爆の話は…とも言われましたけど、私は彼らにとってもいいと思うんです。私も原爆の中から生きてこうしているから。私の願いなのですけれど、彼らに人の世を恨まず、憎まず、生き抜い

てほしいと思います。子ども達は非常に素直だから、まっすぐに受けとってくれるのでないかしら。人間の素晴らしさを見たって感じる子どもがいてくれるだろうと思います。

—それでは、最後に文さんの今後の計画を教えて下さい。

世界の都市でヒロシマ・デーをやっている所をまわりたいと思っています。今年はウィーンを考えているのだけれど。米国やアジア諸国にも行っていないので行きたいですね。特にアジアは(戦後補償など他の問題との関連で)難しいけれど、逃げてはいけないと思います。今後の課題ですね。

### 事務所の動き

- 10月6日 第8回理事会。
  - 10月21日 ピースデポ京都読者会開催。
  - 11月23・24日 地球市民集会1周年長崎会議にパネリストとして梅林、前田が出席。
  - 12月22日 第9回理事会。
  - 12月28日 臨時スタッフ笠本さん歓送会。仕事納め、大掃除。
  - 1月7日 仕事始め。
  - 1月26日 第10回理事会。
  - 2月7・8日 事務所引越し(隣室へ)。
  - 2月21日~27日ピースデポ講演会に招いたペルベズ・フードボイ氏滞日、取材多数。
  - 2月24日 第3回総会。第1回中期ビジョン委員会。
  - 3月27日 外務省に「核軍縮:日本の成績表」提出。記者会見。
  - 3月28日 第2回中期ビジョン委員会。
- 定例発送作業(月2回事務所にて2~3名のボランティアさんと)。  
■新聞記者来所取材(2001年10月3日~4月15日)6件以上。  
■原子力空母母港化調査(ネバの会と月1回のペース、事務所で)。  
■DS研究会(ほぼ月1回のペース、事務所で)。

### こんなところにも登場しました

- 11月8日 慶應大学で梅林講義。
- 2月2日 神奈川県NGO国際交流会で川崎が司会を務める。
- 3月19日 神奈川県内非核宣言自治体連絡会で川崎が核関連情勢について発題。

### 国際的活動

- 11月30日~12月2日 上海ミサイル防衛国際会議に出席、発表。
- 1月8日 ピースデポ助言者のピーター・ジョーンズ来所。
- 4月8日~13日梅林、川崎、NPT準備委員会(NY)にNGOとして出席。

## ピースデポ新事業の運営に 参加しませんか?

月に一回程度事務所に集まり、スタッフや理事と一緒にわいわい話をしながら新しい事業をつくっていきましょう!あなたのアイデアでNGO活動の現場を動かしてみませんか。たとえば、沖縄で、NGOの実践を学ぶような新しい形のスタディ・ツアーを考えています。参加者が自動的に計画の段階から始めていきたいと思います。また、この会報の編集ボランティアも募集中です。経験等は問いません。どなたでも大歓迎です。詳しくは、事務所までお問い合わせください。

**編集後期:**思ひがけない会報編集担当への「出世」に目を輝かせたのは、遙か昔…。初めての編集作業に悲鳴をあげながら毎日でしたが、みなさまの協力のおかげで形になりました。アイデア提供、寄稿やインタビューを快諾してくださいました方々に多謝!(中村桂子)

